

Phyllodoce, f. 「ツガザクラ属」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	Phyllodoc-e	Phyllodoc-ae
Gen.	Phyllodoc-es	Phyllodoc-arum
Dat.	Phyllodoc-ae	Phyllodoc-is
Acc.	Phyllodoc-en	Phyllodoc-as
Abl.	Phyllodoc-e	Phyllodoc-is

skeleton, plancton (プランクトン) およびその合成語等がこの変化をする。前頁に述べたように「種子植物」は "spermatophyton" (単数), "spermatophyta" (複数) であり, 「シダ植物」は "pteridophyton" (単数), "pteridophyta" (複数) となる。ここでは転尾の例として spermatophyton をあげておく。

spermatophyton, n. 「種子植物」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	spermatophyt-on	spermatophyt-a
Gen.	spermatophyt-i	spermatophyt-orum
Dat.	spermatophyt-o	spermatophyt-is
Acc.	spermatophyt-on	spermatophyt-a
Abl.	spermatophyt-o	spermatophyt-is

c) 第3種転尾

第3種転尾の名詞は、様々な転尾の形があって非常に複雑である。その中で、ギリシア語系ラテン語は、既に述べたように、先ず語尾が -ma で終る中性名詞をあげることができる。前頁で述べた stigma, stoma, systema の他に植物の記載上よく出てくる単語としては、lemma (外花類, 外稃, 護穎), parenchyma (柔組織), rhizoma (根茎), trichoma (毛) などがあり, lemma を女性名詞として扱っている記載文も時々見受けられるけれども, 文法的には正しくない。前報では, stigma の転尾を例として紹介したので, ここでは rhizoma の変化を載せる。

第3種転尾に属しながら, 前述の第2種転尾の場合と同じく, 語尾が -on で終る名詞にもギリシア

rhizoma, n. 「根茎」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	rhizoma	rhizoma-ta
Gen.	rhizoma-tis	rhizoma-tum
Dat.	rhizoma-ti	rhizoma-tibus
Acc.	rhizoma	rhizoma-ta
Abl.	rhizoma-te	rhizoma-tibus

語起源のものが多い。この転尾では, さらに単数属格で -onis と語尾になるものと, -ontis となるものがある。前者には, icon, f. (図) や siphon, m. (管) がある。次に icon の転尾を示す。

icon, f. 「図」の変化

	Sing. 格語尾	Pl. 格語尾
Nom.	icon	icon-es
Gen.	icon-is	icon-um
Dat.	icon-i	icon-ibus
Acc.	icon-em	icon-es
Abl.	icon-e	icon-ibus

属名としての, キキョウ属 Platycodon, ジャノヒゲ属 Ophiopogon, ヒルムシロ属 Potamogeton など, この icon と同じ変化をする。

次に, これは属名以外には, 植物学用語には殆ど出てこないが, 前述のように, 主格で -on, 属格単数で -ontis となるものがある。我々になじみの深い Erigeron ムカシヨモギ属や, 日本に自生はないが Leontodon タンポポモドキ属はこの転尾をする。

英語のように, 名詞に文法的な性 (genus) の無い言語を使用していると, ラテン語のような, 名詞の性によって, それに附加される形容詞の語尾も違ってしまう言語はいかにも難しく感じられるが, なれてしまえば, 文法的性と転尾によって, 単語がたくさん並んで文を作っている中で, 単語同志の関係がよく判ってきて理解し易いので, 語尾の形だけで, 自己流に名詞の性を判定せず, 未知の語は一々辞典によって性を確かめるべきである。

(続く)

〔植物ニュース〕 82. ニセシラゲガヤ (新称)

Holcus mollis L.

シラゲガヤ属はヨーロッパからアフリカにかけて10種ほどあるが, そのうちシラゲガヤは世界の温帯地域に帰化し, 県内でもよく見ることができる。

ところで, 昨(1984)年7月に茅野市効外の三井ノ森を調査した所, 竜神池とよぶ人工池のほとりでシラゲガヤに似た1種を採集し, 持ち帰って検定し

たところ H. mollis と同定することができた(清水 29870, SHIN)。これは, シラゲガヤと異り, 茎や葉に軟毛は少く, 上方小花の外花類の芒はまっすぐに小穂からぬき出ているので見分けは易しい。手元の文献に当り, 帰化植物の研究家の浅川富雄氏とも相談したが, 日本には帰化の記録はまだないようである。ニセシラゲガヤの和名を用意し, 長野県新産として記録しておく。(清水 建美)